戦時下の日独学徒交流と「日本精神」

――精神的提携論と原理的日本主義のあいだ――

山本晶子

1　はじめに

一九三〇年代後半に政治的・軍事的に接近していった日本とナチ・ドイツは、同時期に並行して文化面での協力関係の緊密化を目指した。[1] この動きは、三八年一一月に包括的な文化交換を企図した日独文化協定が締結されると、同年のナチ党による対外文化宣伝の積極化も相俟って様々な文化事業を生み出す。戦時下の日独間で展開された各種文化事業のなかでも、明治維新期以来の歴史をもつ学術交換事業は極めて重要視された事項の一つであった。[2]

日独文化協定締結後の両国間の学術交換事業は、大きく分けて二つのタイプに分類される。一つは、二〇年代以来の継続事業で、学生・教授交換事業や図書交換事業が挙げられる。文化協定締結後の事業実施に際しては、従来の事業運営者である日独文化協会、国際文化振興会、[3] OAGなどの民間団体や大学が継続的に担当することになった。もう一つは、文化協定締結後に新たに計画・実施された学徒大会や懸賞論文大会、少壮教授交換事業等の新規事業である。[4] これらに関しては、ドイツ国内の大学・専門学校の学生を統制するドイツ学生指導部（Deutsche Reichsstudentenführung）がドイツ側の、[5] 二七年に創設されて以来両国の文化交流事業を推進してきた日独文化協会が日本側の、事業実施主体となっていた。本稿では、文化協定締結後の新規事業である学徒大会と、その付随事業である日独青年学徒合同野営を、主な検証対象とする。

日本国内で開催された日独学徒大会および青年学徒合同野営に関しては、その活動実態や言説に関する考察が未だ十分とは言い難い。H・J・ビーバーは、日独学徒大会に参加したドイツ人学徒の本国への報告書に基づき大会プログラムと講演の概要に言及しているが、[6] 日本語史料を用いた検証は行っていない。葉照子は、鹿子木員信の日独学徒大会での言説に着目し、鹿子木の日本主義的思想宣伝によって、支配者に対する忠誠心や犠牲的精神の政治的有用性をナチ政権指導部が認知し、日本精神文化研究所の設立計画に結実したと指摘した。[7] こうした鹿子木個人の思想宣伝を踏まえると、次なる論点として、鹿子木らイデオローグが声高に提唱した日独の精神的提携論が、実際の交流の現場において現実的にどれだけ意味を持ったのかという点が重要となってくるであろう。

日独の精神的提携論が日本国内で果たした機能に関しては、近年様々な分野で研究が進められている。田野大輔は、厚生運動を通じた日独の相互イメージ形成に着目し、日本側が当初ナチ・ドイツの先進制度を範とする必要性を論じつつも、厚生運動の意義を戦時下で要請される精神主義や教化主義に収斂させ、日本精神を称揚する論法に組み替えていく過程を明らかにした[8]。また清水雅大は、戦局が悪化し日独同盟の政策的・戦略的効力が失われていく四三年から四四年にかけて、日独の「精神的共同作戦」が諸文化事業の基調理念に据えられ、自国の戦争目的に向けて消費された事を指摘している[9]。

それでは、まだ政治的・軍事的に両国の更なる緊密化が現実的に期待されていた四〇年から四一年の段階においては、こうした日独の精神的提携論はどのように議論されていたのだろうか。本稿では、日本国内で開催された日独学徒大会と日独青年学徒合同野営の言説分析を行い、この時期に精神的提携論がいかなる機能を果たしたのかを検証する。こうした検証は、交流していた学徒たち（大学生や若手研究者）が身を置いていた、アカデミズムにおける言説空間の「歪み」を、新たな視点で捉え直すことにも繋がるだろう。

三〇年代半ば、日本国内のアカデミズムにおいては、帝大粛清運動の旋風が吹き荒れていた。蓑田胸喜を筆頭とする原理日本社は、「国体」を破壊すると見做したリベラル派知識人らを瀧川事件・天皇機関説問題をはじめとする諸事件で攻撃し、更にこうした運動が国体明徴声明によって政治的に正当化されると、日本の思想・歴史を国体論的に解釈する日本主義的教養は、当時の言説空間における「公共性」を得るためのいわば約束手形として機能していく[10]。大学内では三八年の東大小田村事件をきっかけに[11]、日本主義的学生運動が全国的に組織拡大した[12]。運動を指導していた日本学生協会は、国民精神総動員中央連盟や陸軍、外務省などの政府関係機関から助成金を受けて、団体員数を四〇〇〇人以上に膨らませ[13]、四〇年には菅平高原で、四一年には比叡山と御嶽山で、「思想修練」を目的とする全国学生夏季合同合宿を開催した。

昭和戦前期の日本主義運動に関しては、戦後長らく「狂信的」なものとして一蹴される傾向にあったが、特に二〇〇〇年代に入ってから資料収集と並行して体系的な研究が進められ[14]、日本主義者の思想と活動実態、彼らの運動に対する規制と弾圧の過程が明らかにされてきた[15]。こうした研究蓄積を踏まえ、本稿では、日独学徒交流の場面で提唱された両国の精神的提携論が日本主義学生らにどのように受け止められたかという視点から、彼らの原理的な「日本精神」の語り方を、ナチ・ドイツとの交流を通して捉え直したい。

以上より本稿では、第一に、第一回日独学徒大会（四〇年四月）と日独青年学徒合同野営（四一年七月）において、日本とナチ・ドイツの精神的提携を前提に学徒たちが「日本精神」をめぐってどのような議論を展開したのかを明らかにする[16]。第二に、日独学徒交流の場で形成されたこうした言説空間が、日本国内の日本主義運動といかなる形で接続していたのかを実証的に考察する。特に二点目を検証する手がかりとして、日独青年学徒合同野営と同時期に御嶽山で開催されていた第二回全国学生夏季合同合宿に、あるドイツ人学者が講演に現れたとき、日本主義的学生運動家らがいかなる反応を示したかに着目し、日独関係の視角から総力戦体制下の日本の思想戦を再考したい[17]。

2　日独青年学徒合同野営の実施経緯

（1）日独学徒大会から日独青年学徒合同野営へ

一九三九年八月、日独文化協定の実施機関であった在東京日独文化連絡協議会（以下、連絡協議会）の第三回会合において、ドイツ側委員長W・ドーナートの提案を受ける形で文化協定附属議定書案に関する協議が行われ、そこで「学徒会議」と「研究旅行交換」に関する計画が立てられた[18]。日独両国において交互に開催することが約された学徒会議は、同年三月にキッツビューエルですでに実施されており、次回の日本国内における開催にあたっては東京日独文化協会が主催することになっていた。一方、新規事業である研究旅行交換は、特に有能な学生に「自己ノ見解ヲ以テ日本（乃至独逸）ニ関スル智識ヲ獲ルノ可能性ヲ与フルモノ」であり「現下ノ情勢ニ鑑ミ好個ノ企画」と注視されていた[19]。

このように附属議定書案に関する協議段階では、学徒会議と研究旅行交換は別事業として計画されていたが、翌月に欧州大戦が勃発し、物的人的交流が制限されると、諸文化事業は縮小や中止を余儀なくされた。これら二つの事業も、研究旅行交換が学徒会議に吸収される形で「学徒大会」として以後協議されていくことになる。大会の開催要項は、連絡協議会内に特設された準備委員会において、日独文化協会の関係者を中心に協議が進められ[20]、キール師範大学教授K・G・v・デュルクハイムとドイツ学生指導部幹部三名の来日を機に、四〇年四月に山梨県河口湖畔で第一回日独学徒大会が開催された。同大会では、「日独間ノ文化的共同研究」を促進するため「毎年学徒大会ヲ行フコト」との声明が出され、日本国内での第二回大会は四一年一〇月に開催することが決定していたが、その後一二月に延期されたうえ日米開戦で再延期し、結局四二年五月まで実現できなかった。

二回目の学徒大会が度重なる延期に見舞われるなか、大会主催者である日独文化協会が立案したのが、日独青年学徒合同野営であった[21]。合同野営は、学徒大会とは異なり政府関係機関や他の民間団体との協議が行われなかったため、計画協議過程は審らかでないが、その実施目的は外務省への後援要請の記録から窺い知ることができる[22]。

日独文化協会は、合同野営が「時節柄意義深きもの」であるため外務省後援の名義を拝借したい旨を述べ、添付した開催要項では「将来国家を荷負ふ日独若き学徒の力強き結合となり各方面に於て相携へ光輝ある日独両国の友好関係を更に促進せしめんとする」との目的を強調し、合同野営の時局下における開催意義を説いた[23]。こうした要請が功を奏し、約一週間後には外務省条約局と欧亜局から後援名義の許可が下りている[24]。さらに四一年度の日独文化協会決算書には、外務省、文部省、情報局から補助金を獲得した記録が残されている[25]。合同野営は、連絡協議会での協議を経ず民間団体の日独文化協会が独自に計画し運営したものであったが、「日独両国の友好関係を更に促進」するという「国策」に沿った事業として、政府当局からの後援を受ける形で開催に至ることとなった。

こうして、四一年七月二四日から二八日にかけて、富士山麓の山中湖畔において日独青年学徒合同野営が開催された。しかし前月の独ソ開戦などにより、この時期、両国間の大規模な人的移動は制限されていた。そのため、合同野営のドイツ側参加者男女一五名は「在日独逸学生」からドイツ大使館が推薦することとなり、ドイツ側男子班の多くは日独交換学生が占めている。日本側男子班は、東京帝大から四名、明治大から三名、早稲田大・慶應義塾大から各二名、東京工業大・法政大・立教大

から各一名、学部二年次から三年次の様々な分野を専攻する学生で構成された[26]。一方で両国の女子班に関しては、開催二週間前の段階でも名簿が未確定であった。ドイツ側参加者には「ドイツ大使館文化部長〔R・シュルツェ〕秘書」、日本側参加者には「日本体育専門学校女子部教授」や「千葉医大出身医学士」などが見られることから[27]、「学徒」とは言いつつも、その実はドイツ大使館や日独文化協会幹部の個人的な人脈を駆使して女性参加者を集めていたと思われる。

（2）合同野営における活動――新聞報道より――

一九四〇年一月末、第一回日独学徒大会の計画に際し、外務省文化事業部第二課長市河彦太郎は、第一回日独青少年団交歓事業（ヒトラー・ユーゲント来日）における過大な「才祭騒」の出迎えに「食傷気味」であった団長シュルツェの言を踏まえて、「地味ニシテ且実質的ナル日独文化交換ヲ致度」との意向を示していた[28]。学徒大会に付随する合同野営も、「従来のこの種の催しとは異つて両国インテリの『生活の共同』と『思想の交換』による相互認識の徹底」に重点が置かれることとなる[29]。

開会式は「〝戦ふ国〟のつどひにふさはしい清純なつつましさ、新しい世界の歴史を現実に創りつゝある二つの国の若き世代の感激こめて」行われ、「数日間の生活を共にし兄弟の如くむつみ合ひ同じ理想の下に同じ光栄ある目的を語り合はん」と誓った[30]。全日程を通して行われた朝礼・点検・体操では「お互の理解をもつと深めたいといふ真摯な欲求」から両国男女が交代で指揮することとなり、「交す万歳の叫びもドイツ側から『いやさかあ！（彌栄）』日本側から『ジーク・ハイル！』」となった。夜は、篝火を囲んで歌合戦や演劇比べ、合奏など「枢軸和楽」のひと時を過ごした様子が報じられている[31]。閉会式のあった七月二八日には、「活字の上の知識や四角ばつた理屈でなく、起居寝食すべてを共にする生活を通して強烈新鮮な相互認識をつちかひ合はうとする大会の狙ひはどこまで効果を収めたか」として、学徒たちの感想が掲載されている[32]。

以上に見られるように、合同野営の具体的な目的については、主に二点挙げられている。第一に、両国のインテリ層の子弟が、共同生活と緊密な共同作業を通じて思想を交換し、相互認識を徹底する点である。思想交換・相互認識の方法は、知識や理屈よりも、厳密に規律化された身体的な共同生活・共同作業に求められた。朝礼・点検・体操・号令・大会用語は相互主義を貫徹した上で儀礼性が強調され、なかでも日中の厳しい規律と夜の営火（「枢軸和楽」）が全体を通じて対照的に構成されている。「従来のこの種の催し」（「才祭騒」）とは異なると留保しつつも、合同野営における相互認識の徹底の実際は、極めて儀礼的演出に満ちていたと言えよう。第二に、世界新秩序建設の将来を担う「枢軸若人」が共同生活を通じて「同じ理想」の下に「同じ光栄ある目的」を語り合う点である。次章では、参加学徒たちの言説に着目して、これらの点について考察を加えていきたい。

3　日独学徒交流の場で語られる「日本精神」

（1）第一回日独学徒大会における思考停止

合同野営における言説を検討する前に、少し遡り第一回日独学徒大会での「日本精神」をめぐる議論を確認しておこう[33]。同大会では全体を通じて民族精神論が強調される傾向にあったが、なかでも第七日目（四月二〇日）に行われた鹿子木とデュルクハイムによる「国民性と世界観」

という題目のセット講演は、当日がA・ヒトラーの誕生日であったことも相俟って祝祭的な意味合いを持ち、開催前から「東西の権威」による「大会中の呼物」と注目を浴びていた。[34]

なお、いずれも哲学者であった鹿子木とデュルクハイムは、当時、学徒大会をはじめとする日独文化交流の場面で、重要な役割を果たしていた人物である。鹿子木は、一九二〇年代後半の伯林日本学会と日独文化協会設立時に中心的役割を果たし、第一次大戦後の日独文化交流を下支えした。[35]日本国内では、哲学者として慶應義塾大、九州帝大の教授を歴任していたが、学徒大会が開催された時期には言論活動に専念するため教授職を退官している。四二年には大日本言論報国会の専務理事兼事務局長を務め、論壇内部における規制と監視を強化した。[36]デュルクハイムは、キール大学の哲学・心理学教授として二度来日し、三八年から四七年までの一〇年近くを日本で過ごした。[37]戦後ドイツに強制送還されるまで、日々禅や弓道の修行に打ち込み、いわゆる伝統的日本精神を研究する一方で、「混血ユダヤ人」ながらJ・v・リッベントロップらナチ政権幹部との人脈を生かし、ナチ党宣伝諜報部員としても暗躍した。[38]当時日本に滞在していたドイツ語教師D・ゼッケルは、その様子を「彼は、高度な知性をもったプロパガンダのスター的存在で、日本国内をめぐり歩いてナチズムとドイツの国家理念を説き続けていた」と戦後回想している。[39]

大会第七日目の講演で、鹿子木はナチ・ドイツについて以下のように述べた。[40]

「ヒットラーは『全体のため、自己の同胞のため、個人を犠牲とする能力』をドイツ民族の最も本質的特徴としてゐる。此処に人民の献身が生じ、かゝる人民の意志を責任を以て代表し、且つ全民族の為に各個人の無条件的犠牲を要求する権威ある指導者の必然性が生ずる。――私には国民性、指導者精神、及び権威といふ三つの要素がヒットラー総統に於て生ける姿となつて統一され、今日のナチス独逸国の礎柱となつてゐると思はれる」。

それに対し日本の方は、

「日本のスメラ・ミクニ（皇国）は蒼生をスベ（統一）給ふミコト（命）の国であり、従つて全体国家（Ganzheitsstaat）である。同時に併しミコトは日本民族の始祖たる女神天照大神の直系の後嗣にましますが故に、人民の父にましますことゝなる」。

したがって日本とドイツは、「全人民がそれを泉と仰ぐべき権威者を有するといふ点に於て相似てゐる」が、「併し一の重要な相異点は、日本のスメラ・ミコトは天孫であられ従つて神格を有し給ふといふこと」だと指摘し、日本の政治・軍政・経済・教育・芸術の本質的特徴は生成発展の神であるムスビ（産霊）の神を記した「古事記によつてのみ明かとなる」と結んだ。

次に登壇したデュルクハイムは、近代市民社会において共有されてきた「一般人間的妥当性を要求する」普遍的な世界観に対して、民族独特の本質・空間規定・生活意欲の表現となるような「民族性と不可分関係にある世界観」について言及し、以下のように述べた。[41]

「此の意味に於ける世界観は日独共に民族の特質と生活の根底を

なし、且これ等を統一してゐる信念の力の総体にして、世界宗教との交流折衝に依り其の内容を豊富にし、信念と生活に於て民族的世界観を実証するを期待するに至つた、即ち、日本に於いては国家神道の形を採つてゐる世界観、独逸に於いては国民社会主義の世界観の自覚となつた。

日独両民族から共通の敵と目されてゐる唯物主義マルクシズム、個人主義、自由主義、合理主義、国際主義等解消を齎らすべき勢力との闘争に依つて民族的世界観は一新した。国民社会主義は独逸民族をこれら諸反対勢力による解消より救済した。此の独逸的世界観は唯一無二の総統の人格の力、信念の力、意志の力に依つて、全独逸民族に自己に対する義務を與へ以て全独逸民族を合一する強力なる運動となつた」。

それゆえ、国家とは民族特有の生活力・生活形式・生活条件を維持発展させるために民族を意識的に秩序づけたものであり、ドイツ人の個性は、共同体のいかなる部分を成すかを義務づけられた時に創造的作用を発揮する、と指摘した。

鹿子木とデュルクハイムはいずれも、絶対的な統治者によって統べられる生きた有機体として自らの民族を神聖視し、全体（国家）における個の献身や犠牲の正当性を説いている。しかし両民族の精神的な近似性を示唆する一方で、日本の「皇尊」は「天孫」であり神格を有するとしてナチ・ドイツの民族的世界観との差異を強調した鹿子木と、自国の世界観の説明に専心し日本の世界観に殆ど言及しなかったデュルクハイムは、両国の国民性と世界観の相交わることのない異質さを言明することとなった。

ところで、この学徒大会では毎日講演の後に質疑応答の時間が二時間程度設けられていたが、鹿子木とデュルクハイムの講演に対する会場の反応は、以下のような状況だった[42]。

「日独双方の参加者はそれ〴〵質問の準備のため例に依つて別々に集つたのであつたが、期せずして双方共に斯る神聖な問題に関しては軽々に質問等を行ふべきでなく、寧ろ沈黙の裡に敬意を表すべしとの議起り、こゝに大会開始以来初めて質問討議行はれず、全参加者は残された昼食前の二時間を静かに三々五々或は庭園に出で富士山の容姿を仰ぎ、或は紺碧の河口湖を見下して日独夫々にその国民精神の尊厳と相触るゝことの多きに思ひをはせたのは麗はしい光景であつた」。

以上の記録からは、日本とナチ・ドイツの国民性と世界観は、議論の範疇を超えた不可侵の「神聖な問題」であるため「沈黙の裡に敬意を表すべし」という意見が、「期せずして」日独の参加者双方から自発的に立ち上がり、会場全体がいわば思考停止状態に陥ってしまった様子が窺える。両国の若手研究者が「地味かつ実質的な」学術上の議論を交わすために集った学徒大会において、このような状況に陥ったことは、注目に値するだろう。

こうして、第一回日独学徒大会において、両国の国民性と世界観を相互に理解し合い学術的に議論を深めることを期待された「大会中の呼物」であったこの日、双方の国民精神の尊厳を褒め称えあい相似性のみに「思ひ」は馳せられ、鹿子木が指摘しデュルクハイムが言及を避けた両国の「重要な相異点」は黙殺されてしまったのである[43]。

（2）合同野営における学徒たちの感想

第一回日独学徒大会の翌年、同じく富士山麓の山中湖畔において日独青年学徒合同野営が開催されることとなる。前述のような緊密な共同作業・共同生活を経て、「枢軸若人」は何を感じ取ったのだろうか。両国学徒代表者が合同野営を終えて語った感想に着目しよう。[44]

ドイツ男子班代表ゾッフは、「日本青年は感受性が鋭く思索態度が極めて純真であり、思想的放浪性をすでに脱却してゐることがわかった、若い人々のこの純真さをのびのびと伸ばすことが、日本の国にとって大切だと信じます」と述べ、前の世代とは異なる、現在の日本青年の純真さとかつての怠惰な生活態度を脱却した規律正しさとを指摘した。女子班代表ゲッペルト[45]は、ひどい雨降りのような悪環境の中でも平常通りの炊事を行う忍耐強い日本人女性が「家庭婦人として秀れてゐる」とその優秀性を賞賛した。一方、日本男子班代表の堀新助[46]は、ドイツ青年の「国を愛する心と生活を享楽する心がぴつたり結びついてゐるところに伸び行くドイツの力があると考へた」とドイツの国力伸長の源泉を青年たちの生活態度のなかに見出した。

以上のように、両国学徒の男女それぞれの代表者が互いを賞賛し合うなかで、日本女子班代表の溝島孝野[47]は、他の学徒たちとは異なる言説を残している。

「ドイツ側女子班には三十歳近い方も居られ野営訓練の体験を持たぬ方もあつていろ〳〵不自由を感じたやうですが、とにかく野営大会といふ一つの全体に歩調を合せ、その中に溶け込まうと努力してゐたのには頭が下りました、全体主義が政治上のことばかりでなく日常生活にまで活かされてゐると思ひました、も一つ感じたことはドイツの方たちと親しくなれば親しくなるほど日本人としての誇り、日本人としての責務が胸にこみあげ、国際親善とか枢軸友好とか申しましても矢張り日本人は日本人として立派であり偉大であることが先決条件だと痛切に考へさせられました」。

以上の記録からは、まず、両国の男子班と女子班それぞれの代表者一名が相手国の同じ性別の班についての印象を語るという徹底した相互主義が、感想を述べる最終日の場面においても反復されていた点が見て取れる。また、規律正しい身体生活によって得られる精神的純真性と忍耐強さ、全体（国家）への奉仕が日常生活に根づいている点に、相手国の国力伸長の源泉を見出し賞賛する論法が、一貫して用いられていた。しかし、共同生活を経ながらも、当初野営の目的に挙げられた両国の「同じ理想」や「同じ光栄ある目的」の語り合いがなされた様子はほとんどなく、少なくとも彼らの言説からは、同盟国としてのいわゆる同胞意識を高める様子は見受けられない。むしろ、ここで表象された両国青年学徒の様子は、それぞれの賞賛すべき特異性を指摘したものというより、戦時体制下における銃後の国民生活で要請される模範的生活態度を重ね合わせたものと考える方が妥当だろう。相手国青年学徒の賞賛すべき生活態度を鏡映しに、銃後の国民への教化宣伝効果を意識して報じられた言説であったと考えられる。

そして、特に注目すべき点が溝島孝野の言説である。彼女は友好国ナチ・ドイツの学徒との親善（共同生活）が深まるほどに、日本人としての誇りや責務を感じ「日本人として立派であり偉大であることが先決条件」であると、外向きの親善を通じて内向きに愛国心や日本人としての使命感を募らせていた。相手国との相互認識を深めることを目的とした

合同野営において、反射的に自らの日本人としての自覚と誇りを再認識した彼女の姿勢は、この時期の日本国内においてどのような意味を持ったのだろうか。以下、日本主義的学生運動家たちの言説を検証しながら、考察を加えていく。

4　ドイツ人学者と日本主義的学生運動家の邂逅

合同野営とほぼ時を同じくして、山中湖から約二百キロメートル離れた御嶽山に集結していた学生団体も、講演に訪れたあるドイツ人学者の発言に衝撃を受けていた。結論を先取りすると、彼らは溝島孝野と極めて近似した反応を見せ、またそれだけでなく、学徒大会や合同野営では掘り下げられなかった両国の「重要な相異点」が彼らによって再び顕在化することになる。

ここではまず、日本主義的学生運動の思想背景を理解するために、イデオローグとして学生たちから尊崇されていた三井甲之による「日本主義」の定義を確認したい[48]。

「『日本主義』といふのは一つの『原理』である。原理といへば、一々事実に就ていふのではなくして、一々の事実を統くゝるところの概念である。此の概念を段々に押しつめて行つて最後にそれ以上遡ることの出来ぬところまで達した時、それを原理といふのである[49]」。

更に三井は、日本主義が、演繹的議論に依拠した積極的建設的な「主義」ではなく、あるがままに「無主義を主義」とするものであり、あくまで「破邪折伏のため」、日本主義を解しない人々に対する「消極的消毒的血清的作用」を持つものとした上で、以下のように断言する[50]。

「さういふ人々と思想と行為とに対して始〔ママ〕めて『日本主義』はその降魔剣となり清涼剤となるのである。『日本主義』とはそれらの間違つた思想の消毒剤である。〔中略〕『日本主義』は此の悪魔退治の剣であり、汚穢浄化の気息である。けがれを掃ひ清め、滌ぎたる祖先の精神を、現代文化の上に大胆に実現すること、それが日本主義の実現である。それが日本主義の意志である。それが日本主義の行為である」。

このように三井の日本主義は、「主義の否定」と祖先の精神の「実現」によって、原理的な思想実践を重視すると同時に、国体を害する思想の「消毒剤」「降魔剣」となる極めて攻撃的な排除型の思想であった。こうした原理的日本主義を標榜する動きは、一九三〇年代に入ると実際に「降魔剣」として、「帝大粛清・学術維新」を標語にアカデミズムにおけるリベラル派知識人排撃運動へと発展する。そうした日本主義・国粋主義団体による他者粛清（「芟除」）と半ば連動する形で、大学内においても日本主義的学生運動が組織化された。彼らは、学内改革を呼びかけると同時に、他方で原理的な思想実践として聖徳太子の三教義疏や明治天皇の御製を日々拝誦し、「祖国の悠久の生命」を実感する思想実践の作法を開発していった。

こうした背景の下、四一年七月に二回目の全国学生夏季合同合宿が御嶽山と比叡山で開催される。第二回合同合宿に際しては、全国から二週間で七五〇人の参加希望が寄せられ、大政翼賛会の後援と文部省から

の正式許可を得ることに成功したが、開催五日前に「政府当局から新たなる国家目的の指示を受け残念乍ら中止の止むなきに至」ってしまった[51]。団体員数を急速に膨らまし、内務省警保局など取り締まり当局からの監視が強化された時期であったことが関係していたと思われるが[52]、それでも、参加者を減らし、急遽比叡山（参加者一二〇人）と御嶽山（同二三〇人）で分割開催することとなった。本稿では御嶽山合宿でデュルクハイムが講演を行ったときの参加学徒たちの反応を見ていきたい。

学徒大会でも登場したデュルクハイムは、四〇年三月に再来日してから精力的に講演・執筆活動を行い、翌年ナチス叢書の一冊として出版された著書『独逸精神』（アルス、橋本文夫訳）は、日本国内の親独意識向上も相俟って巷間の注目を浴びていた[53]。禅の悟りを応用して、個人に内在する「民族全体意思」を呼び覚まし全体への奉仕に個の充足を見出す全体主義的な「民族的悟り（völkisch satori〔sic〕）」を提唱したデュルクハイムの研究には[54]、日本主義学生らも少なからぬ関心を寄せていた[55]。

四一年七月二一日、合宿第三日目「『生の戦ひ』の日」と銘打たれた日に招聘されたデュルクハイムは、「相提携する日独両国家の世界文化の将来に対する使命」との題目に沿って以下のような講演を行った[56]。

「日本とドイツは使命が似てゐるだけでなく、むしろ一体となつて此の〔世界文化を形成する〕新しい使命に向つて進むものである。〔中略〕さて、東洋に於ては日本が、西欧に於てはドイツが生きた全一的原理からして世界文化を形成すべき使命を持つてゐると断ずべきである。日本は万世一系の皇統をいたゞく無比の国体を持ち、ドイツは日本国体に頗る相似した全一的原理すなはちライヒの観念を相続保持してゐるのである。

両国家は、此の原理を宣揚せねばならない。妨害物は一掃されねばならない。そのためには、先づ日々我々を鍛錬して神の聲を聞く耳を養ふ必要がある。次には、日々我々の内なるものを真に実現してゆく強い力を養成せねばならぬのである。かくしてこそ、日独両国は必ず世界を大地に即した民族の全一的なものとしてゆくために、相提携しうるであらうと思ふ次第である」。

このように合宿におけるデュルクハイムの講演は、第一回日独学徒大会の際には明言を避けた日独提携の意義について、両国がそれぞれに相続保持する「生きた全一体的原理」に基づき「世界文化を形成すべき使命」を共有すると断言したものへと進展していた。しかし参加学生たちが注目したのは、肝心の講演内容ではなく、講演後の質疑応答の際にデュルクハイムが発した次の発言であった[57]。

「日本には世界形成の原理として八紘一宇といふ原理があるといはれる。然し、言葉こそ無いがドイツにも相似た原理ライヒがある。勿論、八紘一宇のそれには遠く及ばないことは率直に認める。唯、一番問題となることは、その原理を発揚すべき国家威力の強弱如何である。この点に至ると、ドイツの方に一日の長があるといはねばなるまいと思ふ」。

デュルクハイムの応答に接し、「はしなくも万邦無比の国体を戴き乍ら、而も恩寵になれて忠節の誠足らず、十全に国力を発揮しえざる日本国民の重罪に対する一つの目覚め」が起こり、会場の「全員は沈思に入つた」。だがデュルクハイムが下山した後、中枢メンバーの小田村寅二

郎総参謀が次のように「絶叫」する。[58]

「諸君！　デュルクハイム伯の言葉を一体何と思ふか。原理らしい原理もないドイツすらもが国家威力の実現に向って斯くの如き死闘を試みつゝある、独ソ戦を思へ！　然るに日本の現状は何であるか。蹶起すべき時は正に今である。非常時などゝいふ言葉では到底表現し得ない曠古の危機が現前してをる。一ドイツ人にたしなめられる様な浅間しい事態を惹起したのは誰であるか、全国民共に負ふべき責務である。此の合宿が如何に重大な意義を持つものであるか再思三省せられよ。予期以上の奇蹟的効果を収めねばならぬ所以も茲にあるのだ」。

小田村の絶叫を受け、参加者の「四百の眼は一斉に東方へ注がれた」。午後から開始された自由討論は、「隊長はじめ参謀まで本部員総出動で」夜半になっても興奮冷めやらず続けられたという。[59]

そして、合宿を通した「訓練」の総合成果として全一二項目が挙げられるなか、デュルクハイムの講演については、次のように記録されている。[60]

「十一、独逸文化使節デユルクハイム伯を招請し日独文化提携の講義を煩はした所、日本国体信順の意志に新鮮にして鋭烈な感覚を喚起せしめる事が出来た事」。

デュルクハイムは、「世界文化形成」の新使命の下に、全一体的な原理を持つ日本とドイツが提携することが可能であると説いたが、日本主義学生には、両国の精神的提携の可否よりも、原理を発揚し実行に移す国家威力の弱さをドイツ人に指摘された事が、屈辱感と共に最も衝撃的に受け止められた。デュルクハイムの言説は、日本主義学生にとっては、理解し歩み寄るものではなく、「原理らしい原理もない」ドイツを踏み台にして日本精神の神聖さを再確認し、「惟神の道」の実践へと奮起するためのツールに過ぎず、学生運動の使命感を覚醒させ参加学生らを蹶起させるために利用されたと言えよう。

5　おわりに

学徒大会と合同野営は、独ソ開戦によって自由な行き来が困難になり、日独間の文化交換事業が徐々に縮小に向かうなか、「時節柄意義深きもの」と位置づけられ、国内のドイツ人学徒を寄せ集めて日本人学徒と交流させ、相互認識を深化することを目的とした。学徒大会は地味かつ実質的な学術交流を目指していたが、合同野営は両国学徒の「緊密な共同作業」を象徴的に報じ、彼らの力強い結合を極めて政治的・儀礼的に演出させたものであった。このような戦時下での日独学徒交流の現場において、特に一九四〇年から四一年にかけて両国の精神的提携論が果たした機能については、本稿を通して以下のことが明らかになった。

第一回日独学徒大会では、鹿子木によって日本精神とナチズムとの間の「相異点」が指摘されたものの、神聖な問題に関する質問を忌避し沈黙裡に敬意を表すべきとの自然発生的な同調圧力が生じ議論の場はいわば思考停止に陥った。合同野営では、徹底した相互主義で双方の青年学徒の姿を讃え合ったが、そうした相手国学徒の姿は、総力戦体制下で求められる銃後の模範的国民像が重ね合わせられ国民に対する教化宣伝

を意識した言説空間の中で消費された。そのなかでも女子班の溝島孝野が、ドイツ人学徒との交流を通じて痛感した「日本人としての誇り、日本人としての責務」は、同時期の日本主義学生のデュルクハイムに対する過剰反応と相似形をなすものであった。

日本主義的学生運動の中核メンバーである小田村は、デュルクハイムの講演の主題である「相提携する日独両国家」の新使命にではなく、日本精神に劣る「原理らしい原理もない」「一ドイツ人」学者に日本の国家威力の弱さについて意見されたことに、激しい屈辱感を露わにし、デュルクハイムの言葉は学生運動の蹶起を呼び起こそうとする激励であると甚だしい曲解を呈した。

学徒大会と合同野営、そして同時期の日本主義学生たちの全国合同合宿において、日本人学徒がドイツ人学徒と接したときに見せた思考停止と使命感の喚起は、二つの意味を持つだろう。

第一に、戦時下における日独の精神的提携論に関し、それを突き詰めていくと思考停止に陥らざるを得ないという限界点が、まだ政治的軍事的側面においても両国の更なる結束が期待されていた三国同盟成立直後の段階で既に見え始めていたことである。提携論者は、そうした精神論を両国の提携を下支えするために必要な知的資源として提供したにもかかわらず、実際の交流の場では信仰と見做され議論の対象にならなかった。知識や理屈よりも身体的な規律正しさや純真性を求める反知性主義的な姿勢、「世界新秩序」を担う両国の「若い国民」の自覚と使命感といった共通項を見せながらも、精神的提携論をめぐる議論は現実的な提携とは程遠いそれぞれの自己目的に即した消費へと閉じ籠っていった。しかし裏を返せば、日独の精神的提携論は同床異夢を暗黙の前提とし、理屈を突き詰めず思考を停止し身体的に感得することによってこそ成立可能であったとも言えよう。学者や学徒が交流する現場で見られた集団的な思考停止は、両国の精神的提携の抑制装置であったと同時に維持装置でもあった。

第二に、「他者」であるドイツ人との交流とそこでの反応を通じて、硬直したナショナリズムの様態が逆照射され浮き彫りになったことである。デュルクハイムと相対した日本主義学生たちは、「他者」を自らの運動目的や使命の中に自己本位に位置づけ、より一層自らが信奉する原理の中に閉じ籠り硬直していく姿勢を見せた。日独学徒交流の場面で見られた、親善理解とは程遠い内向きで閉鎖的な反応を、同時代的な文脈において理解するには、こうした国内のナショナリズム運動との連動性という視点が重要となるだろう。こうした検証を積み重ねていくことで、絶対的な信仰と化したナショナル・アイデンティティの揺らぎと、それに直面した信奉者らが反射的に硬直し過激化していく過程、換言すれば「他者」との交流を通して「自己」を確認、再構築していく過程が明らかになると思われる。

注

（1）一九三〇年代後半から終戦に至るまでの日独間の文化交換事業に関する個別事例研究は数多く存在するが、体系的な研究書としては、一〇年代後半から四五年までの各種文化事業の展開を網羅的に紹介した Bieber, Hans-Joachim, *SS und Samurai* (München, 2014) と、三〇年代半ばから四〇年代前半の日独文化交流事業の進展を政治外交政策との相互連関性に着目して検証した清水雅大『文化の枢軸：戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』（九州大学出版会、二〇一八年）が挙げられる。

（2）明治維新後、お雇い外国人の受け容れや法制度・軍事技術の導入などを通して構築されたいわゆる「師弟関係」に端を発する両国の学術交流は、一九二〇年代に入ると、敗戦国ドイツの学界に対する日本の大学・財界からの資金援助、大学間の学生や図書の交換など、民間団体や大学関係者が牽引する形で「相互的な交流」へと発展した。Friese, Eberhard, “Wir brauchen den Austausch geistiger Güter!” in: Brenn, Wolfgang / Goerke, Marie-Luise (hrsg.), *Berlin-Tokyo im 19. und 20. Jahrhundert*, Berlin, 1997.（藤野哲子・関川富士子による対訳あり。）三〇年代半ばに両国関係が緊密化すると、官民一体型の運営による実施体制の組織化と事業拡充が促進されていく。

（3）この時期の国際文化振興会の活動に関しては、芝崎厚士『近代日本と国際文化交流：国際文化振興会の創設と展開』（有信堂高文社、一九九九年）参照。

（4）少壮教授交換事業は、一年間以上にわたり計画が進められ、実現直前までこぎつけていたものの、独ソ戦開戦などの理由により挫折した。

（5）ナチ党支部である国民社会主義ドイツ学生連盟ＮＳＤＳｔＢ（Nationalsozialistischen Deutschen Studentenbund）と地方学生団の組合連合であるドイツ学生団ＤＳｔ（Deutschen Studentenschaft）間の権力闘争を収束させるため、一九三六年一一月に副総統Ｒ・ヘスが創設した組織。全国の大学・専門学校の学生指導を主眼に、学生生活や研究職斡旋、職業訓練・職業教育を管理し、指導者原理（Führerprinzip）に従って地方の学生指導者が組織的に指令を与えた。アドルフ・シェール『独逸国学生指導部：独逸学生の事業と組織』日独文化協会、一九四〇年。

（6）Bieber, a.a.O., S.747-750.

（7）葉照子「一九三〇～四〇年代の日独緊密化と鹿子木員信」『西洋史学論集』第三七号、一九九九年、一九九～二〇〇頁。

（8）田野大輔「余暇の枢軸：世界厚生会議と日独文化交流」『ゲシヒテ』第二号、二〇〇九年、同「日本の歓喜力行団：厚生運動と日独相互認識」『甲南大学紀要』文学篇第一六一号、二〇一一年。

（9）清水、前掲書、一六五～二〇五頁。

（10）竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代：大学批判の古層』柏書房、二〇〇六年。

（11）東京帝大法学部学生の小田村寅二郎が矢部貞治の講義を批判し学風改革を訴える論文を提出したことに対し、帝大側が無期限停学処分を下した事件。

（12）日本主義学生運動の展開については、井上義和『日本主義と東京大学：昭和期学生思想運動の系譜』（柏書房、二〇〇八年）参照。

（13）井上、前掲書、一二五～一二九頁。

（14）竹内洋ほか編『蓑田胸喜全集』全七巻、柏書房、二〇〇四年、井上義和・打越孝明・占部賢志編『復刻版　日本主義的学生思想運動資料集成』全九巻、柏書房、二〇〇七年。

（15）竹内・佐藤編、前掲書、植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争：京都学派と原理日本社』柏書房、二〇〇七年、井上、前掲書など。

（16）日本側とドイツ側それぞれの参加学生の間でも、交流するにあたっては当然アテンション・ギャップが存在したと考えられるが、本稿では日本側の事業運営者および参加者の視点に焦点を絞る。ドイツ側の視点に関しては、別稿にて論じる予定である。

（17）総力戦体制下においてキーワードとなった「思想戦」をめぐっては、代表的な研究として、赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』

（校倉書房、一九八五年）が挙げられる。また、佐藤卓己『ファシスト的公共性：総力戦体制のメディア学』（岩波書店、二〇一八年）における以下の指摘は、本稿の問題視角を設定する上で大いに示唆的であった。「重要なことは、対外文化政策が日本社会で強調される時期には一つの特徴があるということである。それは、日本人のアイデンティティにおける危機感、ないしは国力衰退への不安が高まった時期だということだ。それゆえ、対外文化政策はありのままの自己表出という以上に、過大な効果を狙った自己演出として企図されがちだった」（二五七頁）。

（18）「日独文化連絡協議会第三回会合議事要録」外務省記録「本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件／日独文化連絡協議会関係」第一巻（I. 1. 10. 0. 2-21/JACAR（アジア歴史資料センター、以下略）Ref. B04012425700）。

（19）同前。

（20）資料番号七一三「日独学徒大会準備小委員会決議並ビニ確認事項」荒木光太郎文書（名古屋大学経済研究センター情報資料室所蔵）。

（21）この時期の日独文化協会は、外務省と文部省（および一九四一年以降は情報局）から補助金を獲得し、ドイツ人日本文化研究者に対する仲介業務（資料提供、研究所紹介、見学旅行の便宜供与、座談会開催等）、日独交換学生・交換教授・フンボルト給費生の派遣、懸賞大会（懸賞論文大会・室内楽作曲大会・ドイツ語翻訳懸賞募集）開催、研究資料の収集と翻訳出版、日本文化に関する講演会や祝賀会の開催などを行っていた。『財団法人日独文化協会昭和十五年度事業報告』日独文化協会、一九四一年。

（22）一九四一年七月八日付日独文化協会発外務省条約局長（松本俊一）宛電信、外務省記録「本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件　日独文化協会関係」（I. 1. 10. 0. 2-22/JACAR Ref. B04012434000）。外務省欧亜局長（坂本瑞男）宛電信（同内容）あり。

（23）「日独青年学徒山中湖畔合同野営要項」（JACAR Ref. B04012434000）。

（24）一九四一年七月一四日付外務省条約局長（松本俊一）発日独文化協会理事長（井上三郎）宛電信「（日独青年学徒山中湖畔合同野営に付外務省後援名儀許可ノ件）」（JACAR Ref. B04012434000）。

（25）「昭和十六年度収支決算書」（JACAR Ref. B04012434000）。

（26）前掲「日独青年学徒山中湖畔合同野営要項」（JACAR Ref. B04012434000）。

（27）「篝火に映ゆ〝枢軸調〟／湖畔に日独学徒野営」『東京朝日新聞』一九四一年七月二五日朝刊第五面。

（28）「日独文化連絡協議会第六回会合議事要録」（JACAR Ref. B04012425700）。

（29）前掲「篝火に映ゆ〝枢軸調〟／湖畔に日独学徒野営」。

（30）同前。

（31）「湖畔の夜／枢軸和楽」『東京朝日新聞』一九四一年七月二六日朝刊第五面。

（32）「融け合った五日間／日独若人野営の収穫を語る」『東京朝日新聞』一九四一年七月二八日朝刊第五面。

（33）本節は、主に第一回日独学徒大会準備委員会「第一回日独学徒大会並ニ独逸国学生指導部代表招致事業概要」（一九四〇年、以下「事業概要」）、及び荒木光太郎編『日独文化の交流：日独学徒大会研究報告』（日独文化協会、一九四一年）に依拠する。前者は、学徒大会の概要と講演の要約、質疑応答、訪日学徒団の旅行行程などを記録した関係

者向け報告書である。一方後者は、大会の翌年に講演原稿を一般向けに刊行したものであるが、例えば所収されている鹿子木の講演は、当日のドイツ語講演のみを荒木が速記したものであるなど、「事業概要」に掲載された講演内容を大幅に修正した形跡が見られる。両史料の性質を踏まえ、本稿では「事業概要」を主な引用元とする。

(34) 「東西の権威起ち論戦白熱化／日独学徒大会第六日〔ママ〕」『山梨日日新聞』一九四〇年四月二一日第三面。新聞報道では開会式の翌日を第一日目と換算していたため、「事業概要」と日程換算にズレが生じている。

(35) 葉照子「第一次大戦後の日独関係修復過程における文化交流史的一側面：鹿子木員信をめぐって」『九州ドイツ文学』第一二号、一九九八年。

(36) 鹿子木に関する主要な先行研究は以下を参照。宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想：安部磯雄と鹿子木員信の場合』木鐸社、一九八四年、船山信一『大正哲学史研究（船山信一著作集第七巻）』こぶし書房、一九九九年、葉照子「鹿子木員信における日本精神とナチズム」望田幸男編『近代日本とドイツ：比較と関係の歴史学』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、クリストファー・W・A・スピルマン『近代日本の革新論とアジア主義：北一輝、大川周明、満川亀太郎らの思想と行動』芦書房、二〇一五年。

(37) 一度目の来日に関しては本国に帰国する際のインタビューが新聞で報じられている。「聖戦の糧〝団結〟／ニッポン精神を掴みに来朝した独教育家／半歳の収穫」『読売新聞』一九三八年一二月一九日朝刊第七面。一九四〇年の二度目の来日に関する日本側行政記録は「一・日独交換教授関係（三）独国人関係〈一一〉「デュルワ〔ママ〕ハイム」教授関係及「ヘルフェリヒ」関係」外務省記録「本邦各国間文化交換関係雑件／日、独国間ノ部」第二巻（I.1.1.0.1_3_002/JACAR Ref. B04011340800）。

(38) デュルクハイムに関しては、没後すぐには哲学者や日本文化紹介者として戦後の功績を賞賛する伝記的著述が数多かったが、二〇〇〇年代に入ってようやくナチ政権との関係性についての実証的検証が加えられるようになってきた。以下デュルクハイムに関する主要な文献と研究論文を挙げる。Gerhard Wehr, *Karlfried Graf Dürckheim*, Herder, Freiburg, 1996; Alphonse Goettmann, *Dialogue on the Path of Initiation: The Life and Thought of Karlfried Graf Dürckheim*, Nottingham Publishing, 1998; Karl Baier, “A Zen Nazi in Wartime Japan”: Part I-III. *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus, In-depth critical analysis of the forces shaping the Asia-Pacific… and the world*, Vol.11, 2013 - Vol.12, 2014; Bieber, a.a.O.; Andree Mitzner, *Karlfried Graf Dürckheim: Mystiker des 20. Jahrhunderts im Spannungsfeld zwischen Ost und West*. Novalis Verlag, Steinbergkirche-Neukirchen, 2017. 日本では松下たえ子の論稿が唯一存在するが、記述の多くをヴェーアの伝記（Wehr, a.a.O.）に依拠している（松下「カールフリート・デュルクハイムの場合：異文化との出合いと体現をめぐって」『成蹊大学経済学部論集』第二四巻一号、一九九三年）。

(39) Ehmcke, Franziska / Pantzer, Peter (hrsg.), *Gelebte Zeitgeschichte. Alltag von Deutschen in Japan 1923-1947*, München, 2000, S.51. 邦訳は、上田浩二・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』（集英社、二〇〇三年、一四九～一五〇頁）に拠る。

(40) 「事業概要」三八～三九頁。なお第一回日独学徒大会の鹿子木の講演については、葉が荒木編『日独文化の交流』に依拠して言説分析を

行っているが、「事業概要」に記録された講演内容については、管見の限り未だ検証されていない。

(41) 「事業概要」三九～四〇頁。

(42) 同前、四〇頁。

(43) 荒木編『日独文化の交流』では、鹿子木の講演内容から「重要な相異点」の指摘が削られている。

(44) 前掲「融け合った五日間／日独若人野営の収穫を語る」。

(45) 「ドイツ大使館文化部長〔シュルツェ〕秘書」との記録あり。前掲「篝火に映ゆ〝枢軸調〟／湖畔に日独学徒野営」。

(46) 東京帝国大学経済学部三年の学生。前掲「日独青年学徒山中湖畔合同野営要項」(JACAR Ref. B04012434000)。

(47) 「日本体育専門学校女子部教授」との記録あり。前掲「篝火に映ゆ〝枢軸調〟／湖畔に日独学徒野営」。

(48) 三井甲之の思想については、以下を参照。片山杜秀「原理日本社論のために：三井甲之を中心とする覚え書き」慶應義塾福澤研究センター編『近代日本研究』第九巻、一九九三年、同「写生・随順・拝誦：三井甲之の思想圏」竹内・佐藤編、前掲書。

(49) 三井甲之「『日本主義』の折伏精神」『中央文学』一九一八年四月号、三頁。

(50) 同前、六～七頁。

(51) 南波恕一「意志の動員：学生運動霊戦史要（二）」『新指導者』一九四一年九月号、六八～六九頁。

(52) 井上、前掲書、一五五～一五六頁。

(53) 「〝独逸精神〟を読む＝デュルクハイム教授著・橋本文夫訳／早大教授・大江精志郎」『読売新聞』一九四一年七月二日朝刊第五面、「書評／ナチス文献　執筆態度に疑義／大串兎代夫」『東京朝日新聞』一九四一年八月一一日朝刊第三面など。

(54) Wehr, a.a.O., S.120.

(55) 久保田貞蔵「雑誌評　『公論』『学生生活』一九四〇年一〇月特別号、六四頁、「巻頭言　学生運動の新展望」『学生生活』一九四一年一月二月特輯号、四～五頁、神原正之「教育の危機」『新指導者』一九四一年四月号、四一～四二頁、夜久正雄「国民精神崩壊の危機」『新指導者』一九四一年五月号、一八～二五頁、「巻頭言　学術再編成：デュルクハイム伯に敬呈す」『新指導者』一九四一年七月号、二～五頁。

(56) 南波、前掲「意志の動員」七四～七五頁。

(57) 同前、七五頁。

(58) 同前、七五～七六頁。

(59) 同前、七六頁。

(60) 同前、七〇頁。

（やまもと　あきこ・慶應義塾大学後期博士課程）